岡山県文化財等救済ネットワークについて

【設立の目的】

阪神・淡路大震災の発生の際、日本ではじめて本格的な文化財救済活動が行われたと言われており、以後、各地で発生した災害に対して文化財の救済が実施されてきました。東日本大震災では、いわゆる文化財に加えて写真アルバムなど個人の“思い出”や日常生活品、自然標本なども対象として、文化財等の救済活動が大々的に実施されました。

文化財等は、被災前の状況を思い起こさせ、さらには被災して離散した人々を呼び寄せる力を持つ、被災地の復興に欠かせないものです。

一方で、文化財等は脆弱な存在でもあり、人の介在がなければ平常時でも喪失しやすい存在です。ましてや大規模災害時においては言うまでもありません。

岡山県文化財等救済ネットワーク(以下「ネットワーク」という。)は、大規模災害から県内所在の文化財等を守るため、大学、博物館、各種法人、行政機関等の関係団体等が連携して活動することを目的とし、平成26年3月31日に設立しました。事務局は岡山県教育庁文化財課内に置いています。

【活動内容】

ネットワークの活動は、平常時と大規模災害発生時に分けて考えています。

平常時には県内所在文化財等の保護・保全活動及び普及啓発活動、調査を実施します。県内文化財等について、特徴や所在地を把握し、広く県民の皆様に大切さを理解していただくための、文化財保護・活用の基本的な活動と言えます。

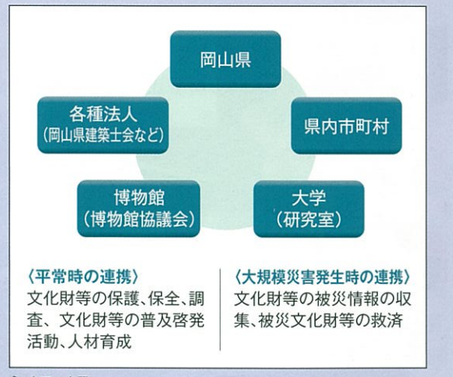
さらに、ネットワークの活動に必要な資質を有した人材の育成も重要な活動の1つです。そのために構成団体を対象とした研修会を実施しています。研修会は、平成28年度以降も継続する予定で、被災文化財等の救済活動や予防措置の取組などについて研鑽を深める機会にしたいと考えています。ネットワーク内の相互の関係性を深めなければ、いざという時にうまく連携できません。研修会などが交流のきっかけや親交を深める機会になればとも考えています。今後の研修会などに積極的に御参加くださいますよう、お願いします。

大規模災害時には、構成団体で連携を図りながらの救済活動を考えています。救済活動では、被災情報の収集とその共有が重要で、状況に応じて構成団体それぞれの専門性を活かした活動の実施を想定しています。構成団体には、日本史や建築、美術工芸、考古学など幅広い分野の専門家が連なっています。多角的な救済活動において、これほど心強い存在はいません。ただし、平常時に思い描く救済活動は、想定の範囲を出るものではありません。研修会などで研鑽を重ね、少しでも想定の範囲を広げる必要があります。

阪神・淡路大震災の発生以降、日本は地震の活動期に入ったとも言われます。東海・東南海・南海地震の発生が懸念され、岡山県でも被害想定が出されました。常に災害のことを考えて通常業務を進めることは難しいと思いますが、万が一の相互扶助体制であるネットワークの存在を頭の片隅に置き、研修会を交流の機会としてもらえればと思います。

(岡山県教育庁文化財課　上栫　武)

27年度研修会での講演



ネットワーク図

編集後記

2016年が幕開きました。今年はJRの晴れの国おかやまデスティネーションキャンペーンと瀬戸内国際芸術祭が開かれます。本協議会も25周年を冠に、県内外の方々に岡山の歴史や文化に親しんでいただけるよう、PRに努めたいと思います。

会報49号には、2015年下半期の話題を集めました。加盟館同士が互いの活動を知ることから(情報の共有化)、いざという時に力が発揮できるネットワークを作っていきたいと思います。県下のさまざまな取り組みについて情報提供をお待ちしています。

(事務局)　岡山県立美術館　福冨　幸

岡山県博物館協議会会報
岡山の博物館
No.49　平成28年3月発行
編集・発行　岡山県博物館協議会
会長　守安　收
事務局
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
岡山県立美術館内
TEL 086-225-4800　FAX 086-224-0648

岡山の博物館

岡山県博物館協議会会報　No.49　平成28年3月

CONTENTS

P1 …… わが館のイチ押し　倉敷考古館
P2 …… 館長随想「新生 備前市立備前焼ミュージアム(館長　臼井　洋輔)
P3 …… 平成27年度 第1回研修会「デジタル画像の撮影・処理・保存について」
P4～P5 …… 衆楽の宴と『衆楽雅藻』
P6～P7 …… 加盟館からの便り(倉敷市立自然史博物館の新収蔵資料－「林原コレクション」)
(アニクリ(ペッカリーと過ごすアニマルクリスマスat IKEDA ZOO in Okayama)を終えて)
P8 …… 気になる情報コーナー(岡山県文化財等救済ネットワークについて)

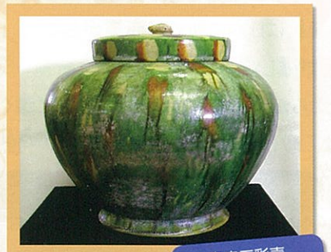
わが館のイチ押し

倉敷考古館「モノから歴史を考える」

当館は1950(昭和25)年11月に、約200年前(江戸時代後半)の土蔵造りの米蔵を改装して開館、1957年には米蔵風の一棟を増築しました。吉備地方一帯の旧石器時代から縄文・弥生・古墳、奈良―室町時代にもわたる考古資料を中心に展示していますが、その展示品は、開館以来60余年、当館で調査し研究報告をしてきた資料が主なものです。このこと自体が当館の重要な特性でもあります。

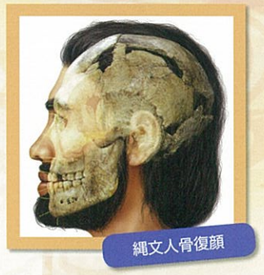
考古館外観

展示品の中には、他の多くの考古関係の展示施設では目にすることが出来ないものが多くあります。弥生時代から古墳時代への変動期、吉備地方勢力の特性を示す、高い器台に載る家形土器(女男岩遺跡)、特殊器台や特殊壷(芋岡山遺跡・黒宮大塚)。古墳時代では、金蔵山古墳の一括鉄器とその容器(埴質)。奈良時代の墓地買地券(天平宝字7〈763〉年銘)、奈良三彩壷(国重文)。平安末期の安養寺瓦経(応徳3〈1086〉年銘)等々。



奈良三彩壷

しかしこうした珍しく、また美しいものだけでなく、旧石器時代の鷲羽山遺跡や周辺遺跡の石器。縄文遺跡調査も多かった当館では、縄文人骨も多く調べ、その中で倉敷市船穂町涼松貝塚の若い男性を、人類学専門の方に復顔してもらいました。写真展示だけですがイケメンです。弥生―古墳時代の製塩遺跡も調べ、吉備地方での製塩技術革新など研究しました。写真は弥生中期の製塩土器と、復元土器での実験結果です。これらも当館では大切な展示品です。



縄文人骨復顔

弥生製塩土器と復元実験土器

館長随想

新生 備前市立備前焼ミュージアム

館長
臼井　洋輔

備前市立備前焼ミュージアムが産声をあげました(2015.10.1)。

小さな館ですが、岡山文化のエッセンスがぎっしり詰まった「備前焼」専門のミュージアムです。

備前焼は、須恵器、寒風須恵器、平安須恵器を経て中世の鎌倉時代へ、そして、近世、近代、現代へと繋がるだけでなく、その命脈は中世以降一度も途絶えたり、本質から逸脱することもなく、今日まで無釉焼締を通し続けてきたわが国唯一の焼物という歴史を有しております。日本の焼物を全部見てきた最古参と云えるでしょう。

古墳時代の暗灰色の須恵器と比較して、7、8世紀のより白い焼物を目指した「猿投」と「寒風」はいち早くそれに成功して、東の猿投、西の寒風が「新時代の両雄」として脚光を浴び、日本のそうした市場を両者でほぼ2分するような勢力を持っていました。

しかし平安末期には律令制の崩壊で、国家のありようがガラリと変わりました。焼物は「調」としての税ではなくなりました。これを機に日本に初めて商業が起こり、自由で広範な物流が始まりました。

ところが都市生活や政権の中枢に深く入り込んでいた備前は、時代が変わったからといって、「庶民が、庶民のものを、庶民のために」作るという時代へと舵を急には切れなかったのです。都から遠く離れていた産地の方がむしろ新しい時代を迎えて「わが世の春」を謳歌していったのです。

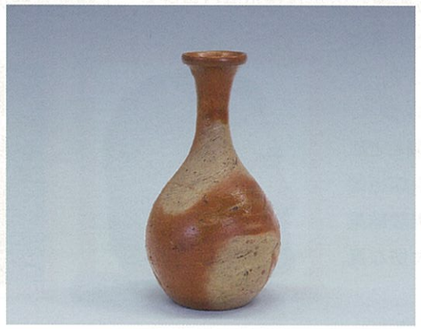
しかし全く常識破りの、岡山らしい独創的な考えと技術(耐火温度が他の五古窯に比較して50℃も低い1200℃であるにもかかわらず、常滑他の1週間に対して、備前は40日間焼いて一番硬い焼物に到達)で反転攻勢に成功しました。こうして室町初期(15世紀)には、日本の台所である京畿に入る港としての兵庫北関(現神戸港)における全焼物に占める備前焼の全国市場シェアは私の計算では実に85%にまでになったのです。

さらに備前焼は桃山時代になると、茶の湯の隆盛の中で、「わび・さび」と云う美意識改革の旗手として君臨しました。

しかし平和な江戸時代になると幕藩体制で安定した国境が敷かれ、諸藩で焼物産業を興しました。また道具としての台カンナの発明で大甕から樽・桶への転換や、都市生活の進展の中でニューフェイスの伊万里・九谷が急伸し、備前の全国市場は大きく縮小しました。

しかし戦後全国的な桃山回帰運動や、高度経済成長社会の中で再び隆盛を迎えました。ところが「失われた20年」に沿った長い不況の中で、備前焼は今は冬の真っ直中という時代状況を迎えています。

その備前焼の長い歴史の浮沈の中で、形成された特徴である「力強さ、大らかさ、潔さ、神秘性、そしてしたたかさ」を備えているということを忘れてはなりません。六古窯の中でも1000年も、寒風須恵器からいえば、1300年も続いた奇跡の焼物ですから、今の不況如きでへこたれるはずはないし、これから岡山らしい新たな独創的発想で不死鳥の如く立ち上がる時がすぐそこに来ていると確信しているのです。わが館はそのように向かうための新たな拠点を目指そうとしているのです。ご支援頂きますよう宜しくお願い致します。



鶴首徳利：館蔵

伊勢崎淳作角壺：館蔵

平成27年度第1回研修会

「デジタル画像の撮影・処理・保存について」

日時：平成27年10月27日(火)　13:00～16:30
場所：岡山シティミュージアム
講師：上山 一郎 氏(株式会社堀内カラー　アーカイヴサポートセンター大阪営業課)

私たち博物館施設では、常日頃から広報物の作成や作品資料調査などで写真画像を取り扱います。近年ではデジタルカメラや各種ソフトの普及により自ら撮影し、画像を処理し、活用する機会が増えたことから、デジタル技術の基本について学ぶ研修会を開きました。

デジタルデータの保存の仕方や閲覧ソフトなど、日々進化する技術を取り入れながら、貴重なフィルム画像もデジタル化して残し、それを調査研究、公開に活用するための方法についてアドバイスをいただきました。

研修に参加しての感想

2015年10月27日、本年度第1回の研修会「デジタル画像の撮影・処理・保存について」に参加した。堀内カラー・上山氏の講義では、フィルム画像をデジタル画像データに保存する際の、基本的な注意点が丁寧に解説された。フィルムのデジタル化の必要性の背景として、フィルムの生産や現像ラボが著しく縮小されていることが説明された。筆者の認識では、15年ほど前までは、まだ、銀塩カメラによるフィルム撮影に、表現力、画質、解像度の点で若干の利があるといわれていた。ただ、それも時間の問題であることも当時から認識されていた。上山氏の講義により、カメラやパソコン、ソフト、プリンターの進化は、フィルムの長所をほぼカバーし、短所は克服され、活用・展開の圧倒的な容易さ・多様性をもたらしたことを、再確認した。そして、フィルム及びフィルムによる現像は、10年以内には消滅してしまうのではないか、という印象を受けた。講義では、フィルムの保存方法についても説明された。フィルムのまま保存することも原本の保存という意味では重要であるが、フィルムを取り巻く状況、資料のアーカイブ化を考えると、デジタル保存することは絶対的かつ、早急に必要であると感じた。これまで、デジタル画像の処理については独学や耳学問で情報を収集し、実施していたが、専門家の講義により再確認する有益な機会であった。

次回は、資料の写真撮影についての研修とのことである。相互に関連する研修を連続していただき、ありがたい。ぜひ参加したいと思う。

(岡山市立オリエント美術館　須藤寛史)

衆楽の宴と『衆楽雅藻』

津山郷土博物館長　尾島　治

トークショーの話者

トークショーの観客

◉衆楽の宴

平成27年10月17日、好天に恵まれた津山市山北の衆楽園において、「衆楽の宴」が催された。東京大学大学院教授ロバート キャンベル氏を招いての「ロバート　キャンベルさんと楽しむ、秋の園遊会　衆楽の宴」開催であった。キャンベル教授は、数年前に偶然入手した『衆楽雅藻』から、津山への関心を深めていたという。当日は、500人を越える人々が、紅葉の一日、優雅な行事を楽しんだ。

「衆楽の宴」の内容は、キャンベル教授をメインゲストとして、曲水宴と『衆楽雅藻』に関するトークショー、漢詩の吟詠とテノール独唱、武家の装束に扮しての曲水宴の再現など、衆楽園全体を会場とする多彩なものであったが、それらに通底するものは『衆楽雅藻』である。これは、明治維新さなかの激動の中で編纂・刊行された漢詩画集で、津山藩主の世子康倫の主催になる、津山藩の武士による曲水宴と書画会から生まれたという、珍しい成り立ちを特色としている。

「衆楽の宴」開催を機に、地元津山でも必ずしも広くは知られていない『衆楽雅藻』について紹介しておきたい。

◉衆楽園と曲水宴

明治3年(1870)3月2日、城北の衆楽園において曲水宴が催された。曲水宴は、流觴曲水ともいう。「觴」とは盃のこと。陰暦の3月上巳の日や3月3日に開催され、緩やかに蛇行しながら流れる水の岸辺に座して、流れ来る盃が自分の前に到達するまでに詩歌を詠ずるという風流な行事で、古代中国にその発祥があるという。水辺で行われていた禊ぎに関連する行事から、遊興の催事へと変化したといわれる。

中国の事例では、『衆楽雅藻』の序文でも「永和之蘭亭」と称されている如く、永和9年(353)3月3日に開催された曲水宴が、後に王羲之の書作品「蘭亭序」により広く世に知られることになった。日本にも古くから伝わっていたらしく、『日本書紀』や『万葉集』にも曲水宴を行ったことが推測される記述がある。

衆楽園は、松平家が森家から受け継いだ池泉回遊式庭園で、松平家入封以来「御対面所」と称していたが、明治初年の頃には「北園」と称されていた。津山藩九代藩主慶倫は、庭園を「士民遊観」の場としてその「勤苦」を慰めることができるようにと、庭園を衆楽園と名付けたという。その触書が出されたのが明治3年の正月であった。

この衆楽園への改名は、慶倫にとって大きな意味を持っていたようで、正門に掲げるため新たに作成された「衆楽園」の額では、文字には金箔が押され、落款の印には朱が入れられていた。

そして、その改名されたばかりの衆楽園において、慶倫の世子康倫が催したのが、「流觴之遺典」すなわち曲水宴であった。曲水宴には、家臣の中から文雅の士約四十人が参加し、至楽の一日を過ごした。また、その後3月6日には衆楽園に隣接する西御殿において書画会が催された。

◉『衆楽雅藻』の刊行

衆楽雅藻の版木と版本

衆楽園での二度に亘る文雅の催しを、書画それぞれの担当者を定め、二巻に記録して残すこととなった。そこで、曲水宴の記録を「流觴曲水」、書画会のそれを「翰墨遊戯」と題して二巻の巻子に仕上げた。作成された二巻は、東京の姿見荘にいる確堂のもとにも届けられた。後に、両巻を整理統合、合わせて一冊本として版行されたのが、今に伝わる『衆楽雅藻』である。

この『衆楽雅藻』には刊行に関する奥付が付されていないため、正式な刊行日は分からない。しかし、実際に刊行されたのは、明治5年末から6年初頭と考えられる。『津山御家務取扱　日記』明治6年1月24日の記事に、「衆楽雅藻御制本ニ相成候ニ付壱冊ツヽ左之面々江被下」とあり、『衆楽雅藻』関係者を含む家臣たちの名前が列挙されているのである。巻子の製作と合わせて刊行準備も早くから進められていたことが日記から知られるが、実際の刊行が遅れた理由は定かではない。

『衆楽雅藻』には3種類の序文がある。後藤竹軒による「流觴曲水」の序「流觴記」、赤松寸雲による「翰墨遊戯」の序「書画会記」、そして上原存軒による『衆楽雅藻』の「叙」である。これらと掲載されている漢詩から、当日の様子を知り、また、『衆楽雅藻』に込められた彼らの心情や意識を推測することができる。

◉衆楽園の曲水宴と『衆楽雅藻』

曲水宴で最も大切な詩作と飲酒の関係については、「蘭亭序」では「一觴一詠」とあり、詩作の褒美として飲むのか、罰として飲むのか定かではない。しかし、その後「罰酒三觴」等として、詩作ができなかった場合の罰として盃を空ける仕法が広く伝えられている。

こうした、中国古代の伝承に対して、明治3年(1870)に衆楽園で行われた津山藩の曲水宴では、「詩不成者不得輙取杯」とあり、詩を作れない者は酒が飲めないという定めであって、飲酒は詩作の褒美だった。そのため、「拙速先飲巧遅或浚」ということで、とにかく早く詩作を成して飲むことが重要で、巧みな作品ができても、遅ければ盃を逃してしまうという雰囲気であった。

そして、「既而盃也肴也逐番泛来揺揺乎泊泊乎如群鴎随波如墜葉下渓以漂流乎水上」と表現されるように、流水には盃だけではなく、こなもちや酒の肴も流されており、鴎の群れが波に揺れる様であり、また、落ち葉が流れ下っていく様であったと描写されている。そして、この酒や料理のために、上流には必要な厨具が用意されていた。次々と酒や料理が流れてくる様子は、まるで、現代の回るなんとかのような状況であった。

一方曲水宴参加者の様子はと言えば、彼らが嘆きながら苦吟する様子や、自由自在に詩作が成って酒を飲む者、つまみの肴を食する者など、席毎に様々だとした上で、全体としては「皆以大楽」とする。あるいは酔った者もいたのであろう。

そして、この曲水宴には多くの観客が存在していた。後藤竹軒の「流觴記」には次のような記述がある。「時有士民遊観者布杉茜裙三三五五魚貫於橋上鷺立於林際」としている。武士のみではなく、女性も含む町人や農民も観客として園内に入ることを許されていたのである。

ちなみに、曲水宴のみならず、6日に開催された西御殿での書画会にも観客は存在していた。曲水宴では、武士以外の者もいたが、書画会は、身分に関しては不明である。ただ、3月6日の日記に、「被為召候面々者勿論拝見罷出候面々迄不残御酒肴被下置」とあり、参加者のみならず見学者にも酒肴が給されているのである。ただこちらは、その後「御礼」の拝謁があったことからすれば、あるいは武士のみであったかも知れない。

後藤は、このような饗宴の様子とその景を「宛然一幅蘭亭図巻」と表現し、まるで蘭亭図巻の様ではないかとしている。これは、後藤のイメージする蘭亭の曲水が、「蘭亭図巻」に描かれる内容であり、目前に繰り広げられている情景がまさにそのイメージと一致しているということを意味している。この「蘭亭図巻」が具体的な作品名なのか、あるいは、蘭亭図に描かれる一巻の物語というような意味なのか、そこは断定できないが、いずれにしても、基準となるそうした映像的なイメージが、彼らの中に存在していたことを示している。

一方、『衆楽雅藻』に掲載されている漢詩の多くは、「蘭亭序」に残されている王羲之の曲水宴を意識している。あるいは、対抗意識といった方が適切かも知れない。

しかし、こうした彼らの意識の中にある「蘭亭序」の曲水宴がどのようなものであったのかという問題が残る。彼らが、「蘭亭序」の文字から獲得したイメージと、後藤の言う「蘭亭図巻」のようなイメージが同じとは考えにくいのである。既に多くの指摘があるように、近世の日本で描かれた蘭亭図あるいは曲水図は、様々な変化を遂げており、王羲之の「蘭亭序」をそのまま絵画化した類のものではない。

『衆楽雅藻』全体の序文を書いた上原も、「蘭亭序」に倣った語句を多用しているなど、彼ら津山藩の文人たちは、王羲之の「蘭亭序」を良く知っていたはずであるが、にもかかわらず、その内容とは大きく変容している後世の蘭亭図の描く世界を、矛盾もなく当然のように受け入れていたということになる。そして、彼らの詩作品の中では、衆楽園の曲水宴は、蘭亭の曲水宴に決して引けを取らないと詠んでいるのである。

彼らにとって重要なのは、「蘭亭序」の世界をそのまま再現することではなく、今、まさに津山の衆楽園に、「永和之蘭亭」以来の「希覯之盛挙」である曲水の情景が存在するということであった。そして、その担い手が、「衆楽園」を命名した藩主慶倫や「流觴之遺典」を主催した世子康倫であり、催しに参加した自分たちであるという、この自負こそが、『衆楽雅藻』に込められた意識だったのではないだろうか。だからこそ、上原が序文の締めくくりに、「蘭亭序」文末の表現をもじって「庶乎後之観今如今之観昔」とし、蘭亭の曲水に並ぶ盛挙として、後世に永く記憶されることを望んだのであろう。

若殿と姫

盃を流す腰元

倉敷市立自然史博物館の新収蔵資料－「林原コレクション」

2015年、当館は、株式会社林原および株式会社林原メセナセンターから、動物・植物・昆虫の化石、現生の哺乳類・植物など、計342点の標本を譲渡していただきました。これらは「林原コレクション」として、後世に永く伝えていくとともに、研究や展示、教育普及活動などに活用していく所存です。今回はその中からいくつかの重要な標本を、生命の進化史に沿ってご紹介します。

地球上にはっきりとわかる大きさの生物が誕生したのは約6億年前で、軟体組織しかもたない海生生物であったと考えられています。その化石はオーストラリアやロシアなどで発見され、エディアカラ生物群と呼ばれています。林原コレクションにはそのうちで、ロシアのアスピエラ（写真①）のレプリカ標本などがあります。

エディアカラ生物群の時代の後、多くの種類の生物が出現したのが5億4100万年前です。それらは身を守るための固い殻を持ち、バージェス動物群とよばれています。この古生代の初期の三葉虫はバージェス動物群の一員で、林原コレクションにはアメリカ産（写真②）やポルトガル産（写真③）があります。

約5億年前、最初の脊椎動物が誕生しました。それらは固い殻をもち顎がない無顎類という魚のように泳ぐ動物でした。その脊椎（背骨）はまだ軟弱で、体を支えるには不十分であったため、固い殻が体を支えていました。林原コレクションには数点の無顎類の化石があり、中でも大型でほぼ完全体のドイツのドレパナスピスは見事なものです（写真④）。

約4億年前、顎をもった多様な魚類が誕生・進化しました。この時代の原始的な魚類化石は脊椎動物の進化史上、重要な意味を持ち、それが林原コレクションにはいくつも含まれています。特に脊椎動物のうちで最初に陸上へ進出し、両生類の直接の祖先であると考えられている、3億8000万年前のユーステノプテロン（肉鰭類）の化石は貴重なものです。これは胸鰭の付け根に前足の骨の構造が、腹鰭の付け根に後足の骨の構造ができている魚類です（カナダ産、写真⑤）。さらに林原コレクションには2億8000万年前の原始的な両生類の化石もあります（ドイツ産、写真⑥）。

一方、植物は動物よりも早く陸上へ進出し、陸上では約4億年前から約2億年前にかけてはシダ植物が繁栄しました。それは現在のシダ植物とは違い、高さが30m、幹の直径は1m近くに達する巨大なものも多くあり、大森林を形成していました。代表的なものはリンボク（アメリカ産、写真⑦）やフウインボクと呼ばれるものです。種子植物が誕生したのは3億7000万年前で、林原コレクションには最古の種子植物のひとつと考えられているモレスネティアの化石が含まれています（ベルギー産、写真⑧）。

約2億年前から6500万年前にかけては両生類から分かれた爬虫類が栄えました。恐竜は爬虫類の仲間で、林原コレクションには肉食恐竜の代表格であるティラノサウルスの全身骨格レプリカ標本もあります。これは北アメリカから発見された「スタン」と呼ばれる個体から複製されたもので、全長は12mあります（写真⑨）。

恐竜がほろんだ後の時代（6500万年前以降）は哺乳類が繁栄しました。約3000万年前の原始的なサルの頭骨化石も含まれています（フランス産、写真⑩）。これは前歯がネズミのように伸びており、サルの仲間がネズミの仲間から進化したことを示すものといわれています。また、約400年前までマダガスカル島に生息し、人類により滅ぼされた走鳥類のエピオルニスの卵の殻もあります。エピオルニスの卵は現在知られている動物の卵では世界最大といわれ、本標本は長径が30cmあります（写真⑪）。

なお、本コレクションの一部は、2015年7月18日（土）から8月30日（日）まで、「夏休み特別企画展 生命 過去から未来へ ～恐竜が倉敷へやってきた！～林原コレクションより」と題して、ライフパーク倉敷 倉敷科学センターにて展示公開し、期間中、36,539名もの来場者がありました。

（学芸員　武智泰史）

アニクリ（ペッカリーと過ごすアニマルクリスマス at IKEDA ZOO in Okayama）を終えて

2015年12月19日（土）、池田動物園において、同園と私どもが共催し岡山県博物館協議会にもご後援いただいた岡山初の大規模ご当地キャラクターイベント、アニクリが開催されました。アニクリには全国から55キャラクターが参加。当日は県内外から数多くのキャラクターファンや家族連れが詰めかけました。アニクリのホストは私どもの人気キャラクター、ペッカリー。そのペッカリーが全国で築いたキャラ脈のおかげで、アニクリにはキャラ界の人気キャラたちを招くことが出来ました。アニクリの開催主旨は、①アニクリを機に県外のキャラクターファンの皆さんに岡山を知っていただくこと、②岡山の皆さんにご当地キャラ文化の真の魅力を知っていただくこと。でしたが、特に②に重きを置きました。それは大手広告代理店の調査で、岡山は日本各地で大人気のご当地キャラ文化への認知、理解、参加度が全都道府県中最下位！だったからです。そのため、初参加の方にも楽しんでいただけるよう運営に工夫を凝らしました。例えば各キャラに個性や特技を発揮してもらい、本来のコアファンである大人にも楽しんでいただけるショー（寸劇、歌＆ダンス、トーク、手品、お絵かき等）。ご当地キャラクターとは地域PRをするスタッフの横で立っているもの。そう思っていた県内の方々は驚いたでしょうし、この試みはキャラファンからも高い評価を受けました。しかし残念ながら、その演出部分に参加出来た県内キャラはペッカリーのみ。キャラ文化が根付いていない岡山では、そうしたパフォーマンスを発揮する場がなく各キャラも必要性を感じていないからです。逆に、だから根付かないとも言えます。しかし県内数キャラの運営者から「今後のキャラの活用という点で極めて勉強になりました」というコメントをいただいたのは、大きな収穫でした。アニクリが岡山県での真のご当地キャラクター文化の芽生えとなれば幸いです。

（BIZEN中南米美術館長　森下矢須之）